ヒトの輪　孤独死・孤立死が７万人超の実態に誰が動く

警察庁が孤独死した人の統計を初めて発表し、2024年、1年間に自宅で亡くなった一人暮らしの人は全国で7万6,020人だったことが分かりました。寂しすぎるニュースですね。年代別では65歳以上の高齢者が5万8,044人と8割近くを占めています。7割超は死亡してから1週間以内に見つかっている一方、死後8日以上経過して発見された人が2万1,856人で、うち1カ月以上は6,945人、1年以上は253人いたそうです。国立社会保障・人口問題研究所の統計によると、50歳までに一度も結婚していない生涯未婚率は20年時点で男性28.25%、女性17.81%で、こうした層が「おひとり様」となり、結果、孤独死・孤立死につながっているとされています。

24年4月施行の「孤独・孤立対策推進法」は孤独や孤立を「社会全体の課題」と位置づけ、政府はワーキンググループを立ち上げ、孤独死・孤立死の実態把握を進めています。ワーキンググループは単身高齢世帯などが増加し、生前に社会とのつながりを失い孤立死に至ることを予防する必要があると指摘しているそうです。

私は、こうした「社会課題を解決する存在として保険代理店（保険募集人）がある」と考え、小職が主宰する結心会では色々な取り組みを行っていますが、実際に保険代理店での「おひとり様の相談」は増えています。「終活」の重要性が地域に認知されると、こうした相談が増えます。昔は福岡市の博多座の近くに「終活カフェ」があり、博多座に芝居等を観に来た高齢者が立ち寄り、色々な相談をされていましたが、こうした「場」を作ることがまずは必要です。保険代理店の一部をサービスカウンターにして「気楽にお茶でもしながら高齢者やおひとり様が立ち寄れる場」を作る。保険代理店が地元で多くの声を聴き、社会課題を見いだし、解決のお手伝いを一緒に考えていくことで、孤独死・孤立死を少しでも防げるのではないかと考えています。

昔、日本生命のテレビCMで流れた「日生のおばちゃん自転車で～」という歌（『モクセイの花』）を記憶されている方はいらっしゃいますでしょうか。歌詞には「日生のおばちゃん自転車でいつも笑顔を置いてった」、「日生のおばちゃん自転車で笑顔をはこぶ ふるさとよ」というフレーズがあります。日生のおばちゃんが昔は各戸を回り、声をかけ、問題点があれば一緒に解決するという構図で、保険募集人が地域を支えていました。特に結婚相談では見合い相手を探すなど、当時の婚活の原動力になっていました。そうでないと1,400万人という驚異的な顧客数は創られていないと思います。

でも、この自転車で各戸を回るという風景、銀行でもありましたよね。おそらく、以前は、行員の皆さんも日生のおばちゃんと同様な存在価値があったので、銀行業務がスムーズに回っていたのだと思います。こうした光景、今ではなくなりました。その結果が、寂しい孤独死・孤立死の一因と考えることは無理でしょうか。個人情報保護が叫ばれ、何も手が出せなくなりましたが、来店型の保険ショップはお客さま自身が来店するというモデルであることから、「おひとり様」の相談が増え、ここからマネタイズできるようになっています。

高齢者に寄り添う一歩を踏み出すために、結心会では、今秋上映予定の映画「ソーゾク」の企画協力をしました。亡くなったお母さんの資産を巡り、仲の良かった兄弟姉妹が「争続」を繰り広げるというストーリーです。認知症や現代家族の在り方、不動産の相続等々、家族で解決しなければならない課題を明らかにし、田舎に単身の高齢者を残している都会の人たちにメッセージを伝えたいと考え、制作に協力しました。全国の保険代理店で自主上映し、孤独死・孤立死なども含め、問題提起をしていきたいと考えています。銀行でも自主上映いただき、次作は銀行がスポンサーとなり、地域が抱える問題提起をしつつ、解決策を皆で考えるための一歩を踏み出していただきたいですね。

映画はさすがに重いというのであれば、「落語家を使った相続セミナー」も開催企画していますのでぜひお声掛けください。6月には東京練馬区でテレビの「笑点」で馴染みの落語家をお呼びしての落語会＆セミナーを開催する予定です。不動産の相続、遺言、お墓、葬式、遺品整理等に関わる方々に参加いただきパネルディスカッションも行うなど、暗い話を明るく元気に取り上げます。銀行でも各地の孤独死・孤立死解消に一緒に取り組んでいきませんか。

（保険健全化推進機構結心会 会長　上野直昭）